芥川龍之介全集

第七卷

昭和三年十二月二十日印刷
昭和三年十二月二十五日發行

芥川龍之介全集第七卷

著作者　芥川龍之介
發行者　東京市神田區南神保町十六番地　岩波茂雄
印刷者　東京市本所區番場町四番地　守岡功
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場
發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店
電話九段(33)一一一〇八番　一一一〇九番　一一一一二番
振替口座東京七四四一六番

（寺島製本）●

第七卷目錄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

書翰

明治四十二年　起一頁
明治四十三年　起三頁
明治四十四年　起六頁
明治四十五年　大正元年　起一一頁
大正二年　起一五頁
大正三年　起二〇頁
大正四年　起三四頁
大正五年　起六一頁
大正六年　起九二頁
大正七年　起一二一頁
大正八年　起一八〇頁
大正九年　起二四四頁
起三五一頁

大正十年　起四七三頁
大正十一年　起五五〇頁
大正十二年　起六三五頁
大正十三年　起六六九頁
大正十四年　起七二九頁
大正十五年　昭和元年　起八二三頁
昭和二年　起八九二頁

索引

書翰

明治四十二年

一　〔三月六日本所から。廣瀨雄宛〕

肅啓

御手紙難有奉誦致し候ジャングルブックは嘗て其中の二三を土肥春曙氏の譯したるを讀み（少年世界にて）幼き頭腦に小さき勇ましきモングースや狼の子なるモーグリーや椰子の綠葉のかげに眠れる水牛や甘き風と暖なる日光とに溢れたる熱帶の風物の鮮なる印象をうけしものに御坐候原作に接したきは山々に御坐候へども目下の樣子にては到底手におへなささうに候へばまづ〳〵あきらめて Rosmersholm をこつ〳〵字書をひき居り候

ロスメルスホルムと云へば此篇ほどメレジュコウスキの所謂「死の苦痛卽ち生の苦痛」の空氣の痛切にあらはれたるは見ざる樣に思はれ候英譯一冊にてイブセン通になる訣には無之候へどもボルクマンの懊惱。ゴーストの主人公の死。ドールスハウスのヒロインの決心。ザ、レデー、フロム、ザ、シーのヒロインの復活。皆この境に新生命の產聲をあげむとして叫び居り候へども殊に此ロスメルスホルムの男主人公と女主人公との最後ほど强く描かれたるは無之候ハウプトマンの「寂しき人々」は此作の感化を蒙る事多きよしに候へども嘗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てよみたる「寂しき人々」の和譯にくらべてロスメルスホルムの方がはるかに力のつよき樣に感ぜられ候

恨らくは泰西の名著も東海の豎子には中々の重荷にて字書をひきて下調べをするときは何の事やら少しも判然せず代る代る譯をつける時に辛うじて事件の一部が明になり三度獨りでよみ返して見てはじめて全事件を望み得る次第に御坐候殊に序幕にては暗示的な言の連發をうけて一方ならず閉口致し候クオバデスもロスメルスホルムの間に繙き居り候へども中々捗らず時々先の頁を勘定してがつかり致し候

今日はクオバデスとロスメルスホルムとの難解の個所を伺ひに上る豫定の所朝より客來にて一日中榮螺の如く蹲りて且談り且論じ候まゝ遂に參上致し兼ね候此分にては雅邦會を訪ふも覺束なく相成目下は復活の後篇をよみ居り候

談話部の龍頭蛇尾に陷りたる委員諸君の遺憾はさこそと察せられ候へども小生にとりては少くも天祐に御坐候ひき、「批評の態度」の愚稿に先生の玉斧を請ひて御迷惑をかけ候夜は、歸宅後書いては消し書いては消し遂には筒井君の所へ電話をかくるに至り候「果斷ありと自ら誇りしが此果斷は順境にのみありて逆境にはあらず」其夜ひるがへして見たる「舞姫」の言我を欺かず候

これより學年試驗の完るまでは一週間禁讀書禁遠歩の行者と相成る筈に候遠足は散歩にて間にあはせ候へども禁書は兎も角も難行にて讀みたくてたまらぬ時は何となく氣のとがめ候まゝそうつと化學の教科書などの下にかくしてよむを常と致し候今度も此滑稽を繰返す事と思へば何となく滑稽らしくなく感ぜられ候あまり自分の事ばかり長々しく書きつらね候イゴイストは樗牛以來の事と御宥免下さるべく候　匆々

三月六日夜　　芥川龍之介

廣瀨先生

硯北

二　〔三月二十八日銚子から。自筆繪端書、齋藤貞吉宛〕

青海原藻の花ゆらぐ波の底に魚とし住まば悶えざらむか

三月廿八日　　銚子にありて

芥川狂生

明治四十三年

三　〔一月一日本所から。自筆繪端書、齋藤貞吉宛〕

遊びに來給へ柑味噌を御馳走してやるから

元旦

龍生

四　〔六月六日本所から。廣瀨雄宛〕

肅白

昨夜は失禮致し候今朝西川と山本と三人にて一高へ願書を出しにゆき候校門をくゞりし時一高の時計臺は九時半を示し居り候ひしも門衛のわれらに與へたる番號札の既に五十番に達したるに先驚申候玄關にて下駄をぬがせられ冷なるタ、キの廊下を跣足にて會計課へ受驗料を納め候へば會計係の人の小生をよびて「あく川さん」と云ふに再驚申候願書差出人の待合せたる所に至れば小使らしき紺の法衣を着たるが秣を切るやうな

機械にて入學志望者の寫眞の緣(代紙の部分)を無造作に切落し居候其後に洋服の老人と和服の中年の人とが願書と寫眞とを受驗票にひきかへ居り候しかも受驗者の多くが廿歳を越えたりと覺しき大人なるに三たび少なからず驚申候前年度の卒業生と一昨年度の卒業生(?)なる松崎と云ふ人に遭ひ候猶細川が其前年度の卒業生なる名前を知らぬ人と一緒に參り居り候ひしは聊意外に感ぜられ候

われらが願書を出せる間に白帽の幾人かが朗々と何やら歌ひながらすぎゆくと異樣なる教授服を着たる痩せたる先生のとほるとを見大に羨しく相成候暫待たせられたる後漸くわれらの番になりて願書を出し候ところ二部乙は山本が五十七番西川が五十八番小生の一部乙は僅に四十四番に候ひき猶丁度一緒になれる小生の知人は獨法にて八十六番に候由申し居り候一部甲二部甲三部等は既に百番以上に達せし樣に見うけられ候理科と文科の不振は之に徵しても明に候

受驗票と受驗の心得を記せる紙とを懷にして泥濘の路を唯今歸宅致し候何となく自己の生活が小さき段落をつけられたるやうな氣が致し候及第しても落第しても此段落は長く殘ることと存じ候

これより直に芝に歸りて再辭書をひき始むべく候空腹にして高心なりし昔を恥づるの心漸に此頃になりて木洩日の如く我胸に光りそめ候とりあへず御知らせ迄　匆々不悉

六月六日

廣瀨先生

芥川龍之介

玉案下

五 〔七月三日本所から。廣瀨雄宛〕

敬啓

先夜は失禮致候其節拜借の DIMINUTIVE DRAMAS 面白く拜讀致居候淡々たるユーモアの水の如く溢れたる誠に此作者の特色なるべく唯今まで讀みたる所にては THE AULIS DIFFICULTY 最心を惹き候今朝山本より慶應入學に定め候由申來り候目下は試驗後早々とて大分興奮してゐる樣に候へば小生の申す事抔は聞入申すまじくもう少し落ちついた所で一高をすゝめて見るつもりに候へどもどうも小生の云ふ事より氣質と境遇との方が勝ちさうにて少々心配に御座候慶應は勿論理財科手紙は鵠沼より參りしのに候

昨日は中塚やら大塚やら神山やら筒井やら長島やらに逢ひ候鐵雄老漢は(TETSUYU と御よみ下され度候)萬年漬の爲腸胃加太兒になり候由形容は多少枯槁致居候へども元氣は中々盛にて「吹毛劍を振つて隻手之聲を切斷すれば如何」などと云ふ辛辣な事を澤山承つて參り候中塚は大分悲觀致居候へども來年は勿論一高を試むべく勉强も休暇後と云はずつゞいてやる由に候

今日朝來微雨獨座して許丁卯の詩集を繙く一味の暗愁の霧の如く人に迫るを感じ候殊に其懷古七律の如き格調痛哀李義山に比すれば更に微、溫飛卿に比すれば更に麗、靑蓮少陵以降七律を以て斗南第一人の名ありし

もの誠に偶然ならず候

末ながら御旅行の幸澤ならむを祈り候　早々稽首

三日朝

廣瀨先生

芥川龍之介

六　〔八月二十九日芝から。絵端書、齋藤貞吉宛〕

留守に御出でになつたときゝました是非又御出で下さい明日か明後日にはかへりますから綠葉の戰ぎにも火取虫の羽の色にももう秋がまゐりましたRodenbachの詩が思ひ出されますハガキを切らしましたからやなアメリカのエハガキで御免を蒙ります

秋立つ日うろ齒に銀をうづめけり

獻上の刀試めすや今朝の秋

一九一〇年八月二十九日

芝にて

芥川生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com